

推薦のことば

早く出くわしたい、江戸の怪異たち

ロバート キャンベル

(東京大学教授)

世

紀とジャンルを超え量産された怪談は、鎖国下の日本人にとってどんな意味があったのか。心の安全弁、紙上のエスケープ。そういう一面も確かにあったに違いないが、むしろこの叢書が示すように、人々は異界のストーリーから「今の世」をどう生きるか、を真剣に考え、感じていたと思う。理屈抜きに大好きな江戸の怪異たち。ページをめくって、早く出くわしたい。



〈体裁〉四六判／上製函入
〈頁数〉四〇〇～五〇〇頁
〈字価〉四〇〇〇円～五〇〇〇円
〈装丁〉長井宛衝

第一巻 新編浮世草子怪談集

ISBN 978-4-336-06033-9

第二巻 前期読本怪談集

ISBN 978-4-336-06035-5

第三巻 清涼井蘇来集

ISBN 978-4-336-06037-2

第四巻 動物怪談集

ISBN 978-4-336-06038-9

第五巻 諸国奇談集

ISBN 978-4-336-06039-6

第一回配本 第一巻…二〇一六年八月刊行
以後巻数順に四ヶ月毎に刊行予定

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
Tel.03-5970-7421 Fax.03-5970-7427
URL: <http://www.kokusho.co.jp>
e-mail: sales@kokusho.co.jp

◎申込書

ご記入後、お近くの書店へお持ち下さい。

江戸怪談文芸名作選 [全5巻] (国書刊行会刊)

1巻・2巻・3巻・4巻・5巻 / 全巻 を

(各) 部 / セット申し込みます。

お名前

取扱店

ご住所
〒

電 話

ファクシミリ

メールアドレス

木越 治〈責任編集〉

江戸怪談文芸名作選

全
五
巻

国書刊行会

知られざる江戸怪談文芸の宝庫

推薦のことば

東雅夫

(アンソロジスト／怪談専門誌『幽』編集顧問)



今 から約二百年前の文化文政時代、約百年前の大正時代、そして平成の現代——文芸エンターテインメントとしての「怪談」には、これまで三度の昂揚期があった。

いみじくも〈江戸怪談文芸名作選〉と銘打たれた本叢書は、その最初のピークへと向けて、江戸の怪談文芸シーンが澎湃と盛り上がりゆく悦ばしき混沌の時代、すなわち、さまざまな可能性を内包した怪談作家たちの試みが濺測と繰りひろげられた「何でもあり」の時代に、ピタリ照準を定めているとおぼ

しい。これは、かつてない快挙である。

近世怪談文芸の黎明を告げた『伽婢子』の浅井了意と、その到達点たる『雨月物語』の上田秋成を繋ぐ、幻想と怪奇のミッシング・リンクが史上初めて、われわれ一般読者の前に、妖しくも豊沃なる全貌を顕わそうとしているのだから。

『動物怪談集』や『諸国奇談集』など、おぼけ好き読者が色めきたつこと必定のコンセプトとネーミングの巻も目につく。私もまた本叢書の発刊を、ろくろ首さながら首を伸ばし心待ちにしている次第。

『江戸怪談文芸名作選』の刊行にあたって

金沢大学名誉教授

木越 治

「怪談」は、『古事記』『日本書紀』の昔から、さまざまな形式で書き継がれ語り継がれてきた。神話・物語・説話・軍記等、様式や文体が異なっても、「怪談」の伝統は日本文学の歴史のなかに、太く大きく根づいている。その伝統は、江戸時代に入っても途絶えることはなかった。いびくしろ、鎖国下の江戸の庶民たちは、新奇な話材に群がり、それを心から楽しんだ。その結果、あまたの「怪談」が陸續として産み出され、江戸文学のなかにおける太い幹に育っていったのである。江戸期の小説は、仮名草子・浮世草子・談義本・前期読本・後期読本等のジャンルに分類するのが文学史的常識であるが、そのすべてのジャンルのなかに、「怪談」は脈々と息づいている。

本叢書は、第一巻こそ浮世草子時代の作品を収めているものの、他の四巻はすべて十八世紀後半の作品を収めている。近世中期、小説史的には前期読本・談義本の時代であり、都賀庭鐘・上田秋成・建部綾足・静観房・好阿・平賀源内らの作家が活躍した時代であるが、この時期はまた、「読本」にも「談義本」にも区分できない、さまざまな新しい小説が試みられた時代でもあった。そして、それらの試みは、十九世紀の江戸において大きく花開くことになる。これら、江戸後期小説群と深いかわりを持つ諸作品を、水谷不倒の名著

『選択古書解題』における紹介に導かれながら、「怪談」「奇談」という物差しで選び出したものが本叢書の第二・五巻である。収録作品の半ば以上は、本叢書においてはじめて活字化される作品である。それゆえ、読者には、これらのなかから、『英草紙』『雨月物語』『本朝水滸伝』『根無草』等と比肩すべき多くの名作を発見する楽しみが残されていることになる。

それと同時に、本叢書では、本文校訂においても新機軸を打ち出した。収録作品の原刊本（版本）がウェブ上で公開されている現状に鑑み、研究的本文ではなく、一般読書人にとっても読みやすい本文づくりを第一義的にめざしたのである。

鎖国下の江戸の人々が「怪談」「奇談」の名のもとに、いかに自由に想像の羽を伸ばしていたか、その様相を本叢書によりぜひとも堪能していただきたいと思う。

第1巻

新編浮世草子怪談集

校訂代表：木越 治（金沢大学名誉教授）

玉櫛笥／玉箒子／都鳥妻恋笛

◆近世怪異小説の鼻祖浅井了意の衣鉢を継ぐ書肆文会堂林義端の手になる奇譚集の至宝『玉櫛笥』『玉箒子』と、時代物浮世草子として刊行されたのち一代記物あるいは江戸読本として外題・装幀をかえながら江戸末期に至るまで読み継がれた隅田川物伝奇長編の傑作『都鳥妻恋笛』を収める。

第2巻

前期読本怪談集

校訂代表：飯倉洋一（大阪大学教授）

古今奇談垣根草／新斎夜話／続新斎夜話／唐土の吉野

◆怪談は、怪異を語ると同時に、怪異に託して自らの抱懐する信念を語る形式でもあった。近世中期にその傾向は顕著になるが、それらのうち、都賀庭鐘作の可能性が浮上している佳品『垣根草』早くから名を知られながら本文紹介の遅れていた『唐土の吉野』二作に加え、高踏的な内容を有する『新斎夜話』正・続二編を収める。

第3巻

清涼井蘇来集

校訂代表：井上泰至（防衛大学校教授）

童唄古実今物語／後篇古実今物語／当世操車／今昔雜冥談

◆清涼井蘇来は十八世紀半ば、江戸で活躍した作家である。作風は、この期の小説の傾向をそのまま反映して、怪異物・巻談物・説話物等と多岐に亘り、後期江戸戯作の成立を考えるためには欠かせない存在である。本巻は、これまでほとんど紹介されなかった彼の作品を一巻にまとめ、読者にその精髓を知らしめるものである。

第5巻

諸国奇談集

校訂代表：勝又基（明星大学教授）

木越俊介（山口県立大学准教授）
向燈略話／続向燈略話／虚実雑談集／閑栖劇／玉婦伝／四方義草

◆中国小説が淵源の一つである我が国の近世怪異小説は、同時にまた、全国各地の伝説と密接に関わる説話集、ひいては巷間に流布するうわさ話やゴシップをも素材とした、興趣に富んだ諸国ばなし形式としてあまた存在する。地域色豊かな多彩な怪談・奇談を一挙に集めて怪談が成立するまでのプロセスを辿り、諸国奇遊の旅へといざなう一巻である。

第4巻

動物怪談集

校訂代表：近衛典子（駒澤大学教授）

雉鼎会談／風流狐夜咄／怪談記野狐名玉／怪談名香富貴玉／怪談見聞実記

◆怪異小説の作者たちは、幽霊や化物以外にも、さまざまな怪異を産み出している。殺された鼠が人間に化けて復讐する話、猿に姿じた人間がもとに戻る話等、動物が怪異の主体として活躍するファンタスティックな物語を多く収録する本巻は、この叢書中もっともユニークな一巻と称していいだろう。